

くろぐみだより

第7号 平成24年10月5日

めっきり寒くなってきましたね。秋ですね。
最近、夏だTシャツだあつついわーと思ったら、急に寒くなってパーカーとか着なきゃいけないので、半そでのボタンダウンのシャツとか、着る時期がほとんどない気がします。

そんな感じで、今年も寒い秋がやってきました。

先日、ファミリーキャンプの寒い夜に、火を囲みながらお話しさせてもらった「キリンの話」が、まあ山の夜の与太話だったんですが、案外評判が良かったので、ちょっと追加して文章にさせていただきますね。

キリンの話。 (副園長)

前編

バカみたいに思われるかもしれませんが。

ぼくは、人間は「なりたいうになれる」のだと、思っています。
正確に言うと、「信じています」。

あきらめなければ、と。

つらくなったりあきらめそうになったりいろいろあるときは、僕はキリンのことを考えます

キリンは、鯨偶蹄目に所属する、いわゆる牛の仲間。
キリンはなんて鳴くか、知ってますか？
「モー」です。
ざっくり言うと、キリンは牛から進化しました。

あるとき。
「あー、あの高いとこの葉っぱ食べてえー！！」
と思った牛がいたのです。
「あの高いとこの葉っぱ食べたらなあ、そしたら食いもん困んねーのになあ！」

キリンの長い首にある頸骨（けいこつ）の数は7個。
これは人間や牛と同じです。ほとんどの哺乳類が同じ。

高いとこの葉っぱが食いたい！

きっと、サバンナで飢えそうなキリンの先祖が、強い意志で、そう思った。

それで、キリンの首は、「本当に」、あんなに伸びたのです。

だから。
なりたいたと思ったように、なれる。
意志の力は、何より強い。

それは、あんなにわかりやすく、僕たちに示されているじゃないですか。

だから、思い続けることです。
意志を、意思を、持ち続けることです。

例えば、なりたいた肉体をイメージして筋トレすると、何も考えずに筋トレするのは、筋肉のつき方が変わってくる、というのも、科学的事実としてわかってきました。

そう、人間は、なりたいうになれるのです。
生き物は、命は、そういう「機能」を持っています。

これは本当のことなのです。
キリンを見たことがあるでしょう？

だから、「どんなことに対してでも」。
「無理だよ」と
意志を捨てるのが、思いを捨てるのが、あきらめてしまうのが、いちばん/カらしいことです。
それがいちばん、科学的じゃない、やり方です。

ぼくたちの命は、ヤワじゃありません。
ぼくたちは、なりたいたものになれる。

意志を信じることです。

「自分を信じること」です。

あさひこ幼稚園では、そう感じることでできる人間を、育てたい、と思っています。

なりたいうに、なりたいた自分に、なれますよ。

…というわけで、とりあえず、僕としては、まずダイエットをはじめようと思えます…大学生のときから15キロほど太ったこの体を…
さて、僕は自分で自分の話を証明できるでしょうか？
…キリンのことを考えよう。

…つづく。

後編

前回の続きの、キリンの話です。

さらに進んで話せば、これは現代でもはっきり解明されていないことを含むのですが…

「キリンは、いきなり登場する」のです。

進化論の基本は、ダーウィンによって考えられました。
「自然選択説」といって、生物が少しずつ変化して、その中で環境に最も適応する種が生き残る、というものです。

しかしこれは、現代の生物学では、全面的な支持を得ていません。

進化の過程というのは、生物の化石から証明されるのですが、実は、「進化の過程・移行期」の化石というのは、ほぼ見つかっていないのです。

つまり、キリンは、ある時期の地層から、いきなり首の長い化石で発掘されるのです。

同じく牛から進化したと言われているクジラも、羽のある昆虫も、翼竜も、鳥類も、「進化過程の移行型」は見つかっていません。

キリンの先祖が、高い木の葉を食べる！という生存競争の末、より長い首の個体が適応して進化していった、というのなら、中途半端な首の長さの生物が見つかってもいいはずじゃありませんか。アルパカみたいな。

でも、いないのです。

つまり、化石があらわす生物の進化は、「徐々に、じゃなくて、いきなり」だと仮定できるわけです。

考えてみれば、それはそうだ。

コウモリになる前の、少し翼がダブっただけで飛べないネズミがいたとしたら、そうでないネズミに比べ、どこが有利で生存競争に勝ち残ったのでしょうか？

超音波を発する器官とそれを聞き取る耳は、それを発達させる前の途中段階があったとしたら、何の役にたっていたのでしょうか？

ツチスガリという蜂は、子どものエサとしてソウムシをしとめる際、ソウムシの腹部にもぐって、肢のあいだのわずかな一ヶ所の隙間をねらって毒針を刺します。

この内部に神経節があり麻酔がうまくいくのですが、ちょうどよい深さで針を刺さないと、獲物は死んでしまい子どものエサにはなりません。

ツチスガリの先祖は、ソウムシをめぐらめっぼうな場所や深さに針を刺し、世代を重ねていくうちに、たまたま幸運な蜂がこのように精確に神経節を麻痺させる性質を獲得したのでしょうか？

そんなことをしていたら、生存競争の中ですぐに滅んでしまうのではないのでしょうか？

オスのみにあるイッカクの角（犬歯が皮膚を突き破ったものは、キツツキの舌骨（舌が顎の下を通って後頭部を一周し、右の鼻孔を通過する、木の中の昆虫を捕食するのに適した構造）は、その形態を獲得するまで、どうやって自然選択を受けたのでしょうか？

ぼくたち人間で言っても、「目」の網膜や虹彩など、どの一部も未完成であったら機能しないような複雑な器官は、どのように自然選択されてできあがっていったのでしょうか？

そう考えれば、こうした変化は、「いきなり変化した」、という結論に達することができます。

ゆっくりとした変化の途中で生存競争のふるいにはかけられていない、むしろ、いきなり変化したものが、その後に生存競争のふるいにかかるのではないか、と考えられるのです。

何が言いたいかというと。

「生物はいきなり変化できる」のです。

キリンのようにです。

これは、なんという希望でしょうか。

僕らは、意志の力によって、いきなり変化することが可能であり、許されているのです。

この世の中は、複雑で、思うようにならないことや、希望を失ってしまうようなことがたくさんありますが、僕らの生命の力をなめてはいけません。

僕らは意志の力で、なりたいたいように、すぐにだって、変わる。

それは、生命の歴史からも、キリンからも、また、柔軟でしなやかな子どもの姿、感性からも、証明されていることではないでしょうか。

いろいろあります。

いろいろありますが、あきらめないように、生きていきましょうね。

★参考・引用

「今西錦司の世界」

<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/4270/imanishi/Daw.html>